

「研修会等名称」全国私立大学FD連携フォーラム 2017年度第1回総会・パネルディスカッション

場所：中央大学 駿河台記念館

期間：2017年6月3日(土) 13:00～17:00

1. 研修の内容

当日は30大学から77名が参加。前半は、本年度第1回の総会が行われ、2016年度活動報告及び2017年度活動方針、2016年度決算及び2017年度予算などが諮られ、いずれも承認された。

後半は、「授業形態・授業時間の多様化への対応～教育効果をあげるための取組事例～」をテーマとして、加盟校による話題提供とパネルディスカッションが行われた。

■話題提供1:主体的に学ぶ授業を学ぶ～東京大学フューチャーファカルティプログラムのデザイン～(東京大学)

東京大学フューチャーファカルティプログラム(東大 FFP)は、大学院生(ポスドク・教職員含む)を対象とした、大学教員の育成プログラム。東京大学は学部・研究科間で授業時間も時間帯もバラバラだったが、昨年度から1時限105分に統一された。東大 FFP は隔週8回、2コマ連続(210分)授業の形態。これから大学教員を目指す院生から現職の大学教員まで多様な受講者が、アクティブラーニングを体験しながら学んでいく。この授業自体が、大学で教える授業のモデルとなることを心掛けている。

■話題提供2: 明治大学における100分授業導入の経緯と実際(明治大学)

明治大学は、今年度4月より、これまで1時限90分、1学期15回だった授業を、100分×14回に変更した。

検討は2012年度から始めた。中教審答申(15回授業+試験)への対応ができておらず、大学暦でも曜日によって14週しか確保できていなかった。祝日の特別授業日が年間7、8回もあり学生や教員からクレームがあった。また、外国語など授業期間内に試験を実施する科目では深刻な授業時間不足が発生していた。

検討当初は夏期・冬期休暇の短縮を提案したが、教員から猛反発があった。2013年4月に大学設置基準が改正され学事暦が柔軟に設定できるようになったため、100分授業×6時限制、14週の学年暦を提案した。学生の集中力が持続するのか、単なる数字合わせではないか、90分×15週=1350分の授業時間が100分×14週=1400分となり授業時間が増加する、といった批判はあったが、アクティブラーニングや国際化への足掛かりに、という積極的意見もいただき、実施に踏み切った。

批判的意見も取り入れ、時間割に教育効果を高められる工夫を取り入れた。100分を50

分モジュール×2に区分けし、さらに朝(8:00~8:50)、昼(12:35~13:25)、夜(20:50~21:40)の補助モジュールを設けた。これにより、50分単位での教授方法の切り替え(前半講義、後半ワークなど)や、50分×週2回授業、補講や拡大授業などに対応できるようにした。また14回のうち1モジュールは必ずしも授業実施を課さないことにしたため、外国語科目でも最終回の1モジュールで試験を実施することができるようになり、試験期間中試験の混雑の緩和が期待できる。授業回数が14回と偶数になったことで、2学期制を基本としつつ授業期間を前半後半の7週毎に区分し、学生の海外留学などにも対応しやすくなった。祝日特別授業日も減少し、GWや学園祭期間中に臨時休校日を設定し1週間通して休みができた。授業時間が伸びたことで、帰宅や部活動に配慮し、5・6限必修科目を配置しないことにしたところ、逆に1・2限の開講科目がふえた。

ただし、現時点で学生からの評判は悪い。長い、辛い、バイトや部活動がやりにくい、といったツイッターの記事がみられ、キーワード検索したところ4月は不満を表す指数が95%を超え満足は2%。しかしGWの連続休暇後には不満指数は40%に減った。

今後は問題集約と検証を行っていくほか、新しい授業時間割と学年暦を柔軟に活用した事例などを調査していく。

■話題提供3：70分授業実施の前提(国際基督教大学)

ICUでは、開学以来一貫して授業は1コマ70分で実施してきた。伝統的に語学教育・教養教育を重視しており、語学習得には90分よりも70分が学習効果上適当であるという理由による。また年間3学期制をとっており、学期完結で授業を行うので、70分授業×週3回というのが基本パターンとなっている。メリット・デメリットはさまざまあるが、一番の効用は、毎週複数回学生と教員が教室で出会うことができる、ということに尽きる。

これらの話題提供の後、発表者によるパネルディスカッションがあった。参加者との質疑応答形式で、以下のような質疑があった。

Q：東大FFPの履修者の反応は。

A：授業終了後にアンケートを取ると、「受講後に自分の行動が変わった」という感想が98%を超える。教員は教育実践の場面での行動が変わった、院生は教員を見る目が変わった、また自身の研究に対する意識も変わった、といった意見がみられた。

Q：明治大学の授業時間変更について、実施に際しての支援体制や実施後判明した課題を教えてください。

A：事務の勤務体制は、2限終了時間が12:30となったことに伴って昼休憩の時間をずらした程度で、基本的には変えていない。講師控室が5限終了時点で閉まってしまうという苦情があり、これは直ちに対応した。現在4キャンパス体制だが、授業後に一堂に会しての会議などはやりにくくなった。また、体育実技の授業で4限終了前に日没して暗くなってしまうなど、いろいろなことはあるが、何とか今は収まっている。学部によっては新時間割に対応する工夫もしているようだ。たとえば初回の前半モジュールを使って統一ガイダンスをやる、など。6時制限で授業終わりが遅くなるので、昼休み時間を廃止せよという意見も根強くあるが、今は残している。

Q：ICU の週 3 回授業についてのリスク管理は。たとえば学生がインフルエンザに罹った場合などは欠席回数が増えてしまうのではないか。

A：インフルのことは考慮していないが、欠席者へのフォローアップはしている。3 学期制はアメリカの制度を取り入れたもの。9 月入学も開学当初からあった。

Q：100 分を超える授業を実施するにあたり、学生の集中力維持の方法は。

A：東大 FFP は 1 回 210 分授業となるが、授業時間が長いという不満は皆無。講義とワークのバランス、20 分単位で授業形式を変えリズムをとるなど考慮している。何よりも、今行っている授業の価値を伝えることで受講者のモチベーションを高めること。なお、FFP は少人数授業だが、大人数授業でもアクティブラーニングを取り入れることはでき

る。Think-pair-share という手法。たとえば、あるテーマについて最初は 1 人でメモを書かせる。次にそのことについて、隣同士で話し合わせる。教員から「初めは左の人から右の人に自分の考えを伝える。次に左右の役割を変えて」などと指示するとスムーズに会話が進み、何度もやると学生も慣れてきて自然に議論ができるようになる。

2. 研修の成果

3 者とも共通した見解は、「授業時間は器であり、教育の本質を変えるものではない」というものであった。本学でも大学暦と授業回数確保は常に課題となっており、とても参考になる事例報告であった。